令和4年度　杉並区立荻窪小学校 経営・評価計画 「自己評価報告書」・「学校関係者評価報告書」 校長　西脇 裕高

学校関係者評価委員会委員長　　佐野　英之

学校の教育目標	◎美しい心の子ども　〇深く考える子ども　〇たくましく生きる子ども

	評価
4	優れている
3	良い
2	努力を要する
1	要改善

経営計画・評価計画

区分	評価指標・評価基準：重点目標	目標実現のための方策	取組（努力）	結果と成果	評価	次年度の取組・改善課題などのコメント	評価委員会評価	学校関係者評価委員評価コメント
特色ある教育活動	**「心を育てる」** 人間尊重の教育（ヒューマン・ディグニティ教育）の推進　道徳授業の充実と継続的な人権教育の取組	・「美しい心」をもった子どもを育てる。自分と他者との違いを認め、人権感覚を磨いていく。オリンピック・パラリンピック教育で培ってきた、障がいのある人への理解と共生社会の実現、国際社会の平和や発展・貢献について考える。	・キーフレーズ「人にやさしく自分も友達も大切に思う」子供の育成。 ・「考え、話し合う」道徳授業の充実。 ・「人権メッセージ」（命・友達・いじめ防止・感謝）の全学年作成の継続。 ・「言葉のチカラ」書を通して心を育てる授業の全学年実施。 ・見通学年（1・6年、2・5年）による体力調査サポート。 ・たのはな生活園との行事参觀交流。 ・オリパラ教育のレガシーの継承（日本の伝統文化を大切にする活動）。 ・学習の「学び合い」学習を通しての「心」の育成。	・全学年で書の学習「言葉のチカラ」を実施し、自分を見つめる時間の大切さを学ぶことができた。 ・「話合い、考える」道徳授業を展開し、子どもが主体的に考え、心を見つめる時間にできた。 ・「人権メッセージ」を全校で実施し、子どもの自己理解、他者理解を深めることができた。 ・オリパラ教育のレガシーとして、自国文化を再確認することや国際理解、障害者理解を進める活動を工夫することができた。 ・教育調査「道徳教育」の保護者の肯定率は77.7％（前年比＋3.8）、児童の肯定率は72.1％であった。	3	・教育目標の重点は「美しい心の子ども」とし、引き続き「心を育てる」教育活動を充実させる。 ・人とのふれあいを大切にした「言葉のチカラ」のような学びの場を広げていく。 ・「人権メッセージ」を継続する。 ・オリンピック・パラリンピック教育のレガシーを大切に、国際理解、自国理解、障害者理解を深めていく。 ・学習の「学び合い」を大切に心を育てる。	3.7	・道徳の授業や「人権メッセージ」、「言葉のチカラ」などの指導や活動を通して、思いやりをもってお互いを理解しかかわり合う心や態度が育っている。 ・現状を軸に発展継続あるのみ。 ・全学年で「言葉のチカラ」を実施して、書の学習だけでなく自己を見つめる機会を設けている。 ・教師が子供に、あるいは子供同士で伝える言葉によって「自分は大切にされている。必要とされている。」ということを自覚できる。受け売りではない自分の言葉で表現できる力を育ててほしい。 ・授業中に、分からことを他の子に教えてあげる、分からないことを他の子に聞くことが、ごく自然に行われているように見える。 ・子供の落ち着いた授業風景から分かるが、学校生活全般の保護者及び教育者が共に高いことは評価できると思う。 ・校内での子供たちの表情が穏やかで、自然な態度で学校生活が送られている印象を受ける。 ・「言葉のチカラ」などを通プログラムにより人間性の醸成に継続的に取り組んでいることは、学校全体の雰囲気にも表れており、評価に値する。 ・書道を通じ、自分自身と対話すること、自身の良いところを見つけ他者の良いところも認め合うこと、心を込めることの大切さを伝えてきた。全学年実施することで、効果が定着していることを感じる。
	「一人一人を大切に」 特別支援教育の理解と推進	・「一人一人を大切にする」、全校で取り組む特別支援教育への理解を高める。安心できる学級・学校を目指し校内体制を整え、個のニーズに応えるきめ細やかな指導を工夫する。特別支援教室（すまいる）の指導充実と在籍学級との連携に努める。	・全学級において「特別支援教育」を展開。 ・校内委員会を毎週実施。個に応じた児童への組織的支援の検討。 ・特別支援教室巡回教員と学級担任の連携による支援・指導の充実。 ・都立特別支援学校との復籍交流の実施（直接交流・間接交流）。 ・「特別支援教育」を話題にした保護者会の実施（共通の資料配布）。 ・学習支援教員による個別指導や学級支援員による個別支援。	・特別支援教育校内委員会を毎週開催し、SCや巡回指導教員が参加する機会を増やし、指導支援策を組織的に検討した。 ・特別支援教室「すまいる」の巡回指導教員と在籍学級担任の連携面談を実施した。日常的な交流時間を十分に取れないことが課題である。 ・巡回心理士や教育支援チームの助言も生かし、通常の学級における指導、支援の充実が図られ、落ち着いて学ぶ子どもが増えた。 ・特別支援学校との復籍交流を再開できた。教育調査「特別支援教育交流及び共同学習」の保護者肯定率は前年比＋8.2ポイント（40.1％）である。 ・教育調査「特別支援教育の理解・啓発」の保護者肯定率は59.2％だが、前年比＋8.7ポイントである。インクルーシブ教育としての特別支援教育の理解をさらに広げていきたい。	2	・すべての子どもを大切にする「特別支援教育」の考え方を保護者に十分に理解してもらえるよう、保護者会や学校だより、HP等で積極的に発信していく。 ・特別支援教育校内委員会の毎週開催を継続する。 ・特別支援教室と通常の学級の連携の時間をさらに生み出す工夫をする。	2.8	・特別支援教育について、保護者の肯定率が少し向上し、理解は進んでいると思われる。通常の教室でも一人一人の子供の教育的なニーズに応じた指導、支援を工夫していこうとを、引き続き知らせていく必要がある。 ・特別支援教室の取り組みや考え方を児童・保護者にしっかり理解してもらうことは神経を使うが、毎年工夫を加え着実に推進していく必要がある ・報道によると11人に1人の割合で発達障害あるいはそのグレーゾーンの子供がいるということで特別支援教室の重要性は高まっている。しかし、保護者の評価はまだ低い。もう少しアピールが必要と考える。 ・クラスの中で他者と協働することが難しい子に対して、教員のみならずクラスの子供たち全員で上手く時間を共有できる方法を模索しているように見える。自然と多様性を受け入れることができるようになっている。 ・「すまいる」の共存は、子供たち、保護者ならびに教員をはじめ、関係者に対して、正しく伝え続けることが重要だと思っている。 ・特別支援教育と特別支援教室の区別がつきづらい。 ・特別支援教育とは、一人一人を大切にとは、具体的にどのようなことなのかが分かりづらいのでは。 ・保護者に対しての周知はまだまだこれからだが、学内の取り組みや連携など、積極的に取り組んでいると言える。 ・こうしたことは、多方面から伝えていくことであり、自分を認めることが他者との違いを認めていくことの第一歩である。 ・こうした観点から、書道や絵画などの芸術活動を通じるなどして、多角的に「一人一人を大切にする」土壌を作っていくことも大切であると感じる。
	「つながりを活かす」 小中一貫教育・幼保小連携教育の推進	・小中一貫教育グループ校3校で「かかわり、つながり」を重視した一貫教育を推進する。また、幼保小連携教育について、近隣保育園と連携し、新1年生のスタートカリキュラムの検証・改善を行う。	・子幼保小連携、小中一貫教育の強化（学びの「連続性」）。 ・一貫教育グループ3校（宮前中、久我山小、荻窪小）による合同授業研究会の実施。 ・6年生の中学校授業見学、部活動見学。 ・中学生の合唱披露、生徒会による説明会。 ・1年生の小学校スタートカリキュラムの実施と検証（子幼保小の連携で作成）。 ・近隣保育園との交流活動（行事参観、5年生・1年生との交流活動）。 ・教職員の交流研修の実施（子幼保小や小中合同研修）。	・コロナ禍であったが、第6学年児童が中学校訪問をし、授業見学と説明会を実施できた。 ・中学校の合唱祭金賞クラスが来校し、合唱披露を計画したが、残念ながら感染状況が悪化し中止となった。 ・教員による近隣小中3校の連携研修会を、中学校にて開催した。 ・近隣の5保育園が本校のアートウィーク作品展を見学した。 ・教員と保育士による近隣保育園と小学校の連携研修会を開催した。 ・教育調査「小中一貫教育」の保護者肯定率は57.8％となり、前年比＋28.3ポイントである。	2	・小中一貫教育や幼保小連携による「学びの連続性」の価値を保護者、地域に十分に伝えていく。 ・幼保小連携により本校の「スタートプログラム」を改善する。 ・研修の内容を見直し、教員間の児童生徒理解を深める。 ・区の施策の成果を、保護者、地域に十分に伝える。	2.4	・小中一貫教育について、保護者の肯定率がまだ低いが、昨年度より向上した。引き続き幼保小連携、小中連携の具体的な活動の機会をとらえて、内容や意義などを啓発し周知していく必要がある。 ・工夫し、既存の取り組みゆ見ればもできることを行い、地域・保護者と共有する ・コロナ禍でなかなか具体的な交流が実施できない。規制が解除される方向にあるので教職員を含めた活発な交流を期待したい。 ・「一貫教育」は何をもってゴールとするのかイメージが沸いていない が、見学だけでなく、例えば小6と中3が同じ課題に取組み、中学生のリーダーシップや論理力などを身近に感じることも貴重な機会になると思う。また、体育など運動や遊びを通じて「こんな中学生になりたい」など手触り感をもって感じることができたなら、より一層、子供たちの記憶に残る取組になるのではと思った。 ・保護者肯定率が前年比＋28.3％は評価できると思うが、依然として理解は深まっていないように感じる。 ・宮前中との合同協議会に出席した印象では、子供たちのことを考えた取り組みの議論には苦しんでいるが、小中での共通した取り組みには、時間がかかると思われた。荻窪小学校の学童クラブ施設が、宮前中に設置されることについても小中一貫教育の前向きな試みとして議論してほしいと思った。 ・コロナ禍において、断絶が見られた交流も徐々に復活し、また保護者に対しても理解が進んできたと思える。
	「広い目を育てる」 環境教育の継続・充実	・「エコ・スクール」として環境教育を、学校や学校支援本部と連携し、充実・発展させる。「自分さえよければ、今さえよければ」でなく、持続可能な社会と環境を意識し、自ら考え行動できる子どもを育てる。	・自分ごとして環境問題を考える子どもの育成。 ・「エコ・スクール」を活用した荻小環境学習プログラムの改善。 ・連絡学会や区環境ネットワーク等のゲストティーチャーを活用した環境学習。 ・環境ボランティアの協力による環境委員会の活動の充実。 ・中学生の合唱披露、生徒会による説明会。 ・エコシステム校舎の保護者・地域の方々の理解促進（保護者・地域対象の「エコ・ツアー」の開催）。 ・子供の主体的な「杉並区小中学校環境サミット」への参加。	・建築学会や学校支援本部と連携し、見直しをした「荻小環境学習プログラム」の実施に取り組んだ。 ・区と連係した「環境教育」の取組を、第6学年で実施した。 ・環境委員会の子どもたちが、環境ボランティアの協力のもと活動し、環境サミット参加をした。 ・コロナ禍で「エコツアー」は開催できなかった。 ・本校の特長であるエコシステム校舎を最大限生かして、特色ある教育活動を、さらに推進する。	3	・特長であるエコシステム校舎の活用をさらに進め、本校の特色ある教育活動を再構成する。 ・エコスクールとして「環境」をテーマに教科横断的なカリキュラムとして「環境学習プログラム」を改善する。 ・「エコツアー」を開催し、地域の方に本校を理解していただく。 ・環境ボランティアの協力で環境委員会活動を充実させる。	3.5	・エコスクールとしての校舎と「環境学習プログラム」に基づきながら、子供たちの視点で環境問題について考え、課題を探究するような学習を工夫している。 ・学校の特徴を生かした取り組みとしてさらに推進してほしい。 ・ESG や気候変動リスク関連の教育は、幼少期からの学習が重要で、特に荻小の子供たちはサステナブルな生活のために必要な行動を、「特別なこと」ではなく「当たり前のこと」だと無意識に動く・考える子供たちが多いと感じている。 ・エコスクールとして環境をテーマにするのは最適な学校・校舎であると思う。そのことから肯定率はもっと高くなってもよいのではないかと思う。 ・児童数が増加し、学級数が増えたことから、外部支援が難しくなり、教員との日程調整もできにくいことから、直接話し合うこともできない ままになっている。学習指導要領の改訂に伴う授業の組立直しも、十分な形で進めることができなかった。体験的な学習として、子供たちの興味を育てる環境学習の新たな進め方を来年度は定着させたい。 ・毎年行われている環境学習やエコツアーなど、荻小独自の取り組みが根付いており、これは評価に値すると思う。
学習指導	**授業力の向上** 学習指導要領に基づく新しい学習の創造	・主体的・対話的で深い学びの成立を目指し、校内研究として全教科・領域において、「問いをもち、考え、話し合う」授業を展開し、「学ぶ子ども」を育てる。同時に、ICTを積極的に活用し、どの子にもわかりやすい学習展開を工夫する。	・研究主題「学ぶ子供を育てる」のもと、全学年で「主体的、協働的な学び」のある授業を展開する（全学年・毎月で年間7回の研究授業）。 ・GIGAスクール委員会を中心に、ICT（1人1台TB・デジタル教科書）を活用した授業を全学年で展開する（「個別最適な学び」）。 ・本時のねらいを明確にし、見通しのある授業を展開する（「わかる授業」）。 ・授業規律と学習スタンダードの徹底。 ・地域人材を活用した「肌感覚・心感覚」を大切にする体験的な学びの推進。 ・学校だよりやHPを活用し、保護者や地域の「荻小の学習」の理解を深める。 ・発達段階に応じた「家庭学習」を充実し、子どもの学習マネージメント力を育成。	・「学ぶ子供が育つ」をキーワードに、「主体的・対話的で深い学び」の実現をさらに進める授業を創造する。 ・一人1台タブレットPCを活用し、個の学びと協働的な学びを展開する。 ・各学習調査を分析し、授業の成果と課題を把握する。 ・問題解決的な学習を、全教科・領域で展開し、教科横断的にカリキュラムマネジメントに取り組む。	3	・「学ぶ子供が育つ」をキーワードに、「主体的・対話的で深い学び」の実現をさらに進める授業を創造する。 ・一人1台タブレットPCを活用し、個の学びと協働的な学びを展開する。 ・各学習調査を分析し、授業の成果と課題を把握する。 ・問題解決的な学習を、全教科・領域で展開し、教科横断的にカリキュラムマネジメントに取り組む。	3.3	・学校として「問いをもち、考え、話し合う」授業づくりについて研究を積み重ねており、子供たちの学習の様子や態度にもその成果が現れている。この成果を保護者に伝えて学習のあり方について理解を深めたい。 ・児童の肯定率は、「協働的な学び」「教材教具（ICT）」などが高いのはよいが、「指導の個別化」「探究の学び」など学年によってばらつきがあり、原因や課題を分析する必要がある。 ・教育調査の数値からも成果がうかがわれる。 ・主体的に学ぶ子供を育てる授業を展開するよう努力している。授業参観の折に、教えあう子供の姿を見ることができた。 ・授業力は教員個人の能力に負うところが大きいと感じる。学年ワンチームとしてもっと横の連携があってもよいのではないかと思う。 ・ICTの利用に教員も子供たちも慣れてきたように思われる。上手く活用して効率よい授業が行われている。 ・地域人材を活用した「肌感覚・心感覚」を大切にする体験的な学びの推進については、ぜひ続けてほしいと思う。前項目の「広い目を育てる」と重複するが、「ICT活用」は必須である反面、正しい使い方とICT活用が全てではないことを、子供たちには同時に感じて欲しい部分である。 ・ICTの活用のゴールや正解が何かはわからないが、子供の混乱なく落ち着いて活用している姿は評価できると思う。 ・授業を参観した際に、同じ教科でも、教員の独自の工夫も盛り込まれており、校長の指導もあり、子供に分かり易い授業とするための取組についての意欲が感じられた。 ・ICTへの取り組みは、まだまだ始まったばかりだが、子供たちは与えられたツールを活用し、授業に取り組んでいるように思える。また、研究主題に基づき、教員も積極的な授業展開をしており、今後も継続してほしい。
生活指導	全校による**生活指導体制の確立**	・いじめ、不登校、問題行動に対して、学校組織で対応するとともに、危険を予測し回避する能力や他者や社会の安全に貢献できる資質や能力を育てる取組を行う。	・「荻小スタンダード」を策定し、全校で統一した生活指導を展開。 ・全教職員で、子ども一人一人に寄り添った生活指導を心掛ける。 ・基本的な生活習慣を安定して定着させ、感染症予防対策の徹底を継続。 ・「あいさつの励行（登下校時の声かけ、校内でのあいさつの日常化）。 ・「荻小スタンダード」を確認し、全校で統一した指導を進める。 ・スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの連携の充実。 ・自己理解、他者理解を育てるトラブル解決（互いを認め合う指導）。 ・「学校いじめ防止基本方針・全体計画」の策定と実践。 ・年2回いじめアンケートを実施し、年3回いじめ防止研修会を実施。 ・毎月いじめ防止対策校内委員会を開催。	・毎月、いじめ防止対策校内委員会を開催した。 ・いじめアンケートを年間3回実施し、課題発見解決に役立てた。 ・不登校傾向等については、組織的対応を心掛けている。オンライン活用等により、学校とつながる機会を増やしている。 ・感染症予防に努め、校内で感染が広がることは無く、過ごせている。落ち着いた生活態度の定着してとらえたい。 ・教育調査「教育相談体制」の保護者肯定率は62.2％、「いじめ対策」52.1％、児童肯定率は68.8％であった。	3	・いじめ対策委員会を毎月開催し、組織的に対応する。 ・いじめの認知、解決への組織的な手立てを図る。 ・感染状況に応じた感染予防を工夫し、基本的な生活習慣として、落ち着いた学校生活を推進する。 ・エンカレッジルーム等子供の居場所を整備する。 ・全教員が教育相談対応のスキルを上げる努力を続ける。	3.3	・子供たちは、「荻小スタンダード」とコロナ感染予防のための生活習慣の徹底を継続し、生活や学習の様子は落ち着いている。教育調査の観点との対応が不明確である。 ・いじめ、不登校などへの対策について保護者の肯定率がやや低いが、具体的な対応策や相談体制について一層の周知が必要であると思われる。 ・保護者のいじめ対策肯定率に児童の肯定率との乖離があり、保護者に丁寧な説明を繰り返し理解を促す必要がある。 ・学校生活全般に対する保護者の評価はいつも高く、保健衛生面やその問題への対処などきめ細かく行われていると思う。 ・いじめ対策の具体的な対策が見えない分肯定率は高くないが、特に大きな問題がないことは対策ができているからだと思う。 ・荻小スタンダードなど、教員の取り組みにより子供たちは落ち着いた学校生活を送れているようだが、担任交代や校内の些細なことに気にする保護者もいることはアンケートにも表れている。保護者にも安心してもらえるような情報公開を今後も期待したい。 ・いじめがあるいうことを、子供たちが発信しやすい環境をつくることが大切なので、委員会が毎月開催されていることは良いと思う。
体力向上	年間通して**全校で取り組む体力づくり**	・体力調査の結果を分析し、日常の遊びや体育の授業、特設の体力向上の取組（荻パワ）の実施で、体力づくりに取り組む。	・体育の授業改善と日常的体力向上の指導の継続。 ・「荻小パワーアップ」による日常的に運動に取り組む環境づくり。 ・栄養教諭の授業参加による効果的な食育指導の展開。 ・家庭科や各教科の学習内容と連携した給食献立の提供。 ・全学年による体力調査の実施・分析	・体力調査を実施し、実態と共に、体力向上への意識を高めた。 ・コロナ禍における体力低下は大きな課題である。 ・「荻小パワーアップカード」を作成し、継続的に体力向上に取り組める環境をつくった。 ・栄養教諭と学級担任が連携し、食育授業を行った。 ・教育調査「体育・健康教育」に関する保護者の肯定率は79.5％（前年比＋2.9ポイント）であった。	3	・「体力」は運動、食育、生活習慣の総合力と捉える。 ・栄養教諭、養護教諭の参加による指導を充実する。 ・「荻小パワーアップカード」を効果的に活用する。 ・「昔遊び」等の身体的な活動を伴う遊びの良さを取り入れる。	2.9	・コロナ禍のもと、「荻小スタンダード」とコロナ感染予防のための生活習慣の徹底を継続し、生活や学習の様子は落ち着いている。教育調査の観点との対応が不明確である。 ・継続的な体力向上が必要。 ・保護者の子供に対する体力向上への意識をもっと高める必要があると思う。学力向上の意識が高い分、体力向上の意識は低い。 ・体力調査の結果の分析は、数字的な評価である。しかし、本質として、運動する喜び、自由で遊びの創造を楽しむむといった行動につながっていないように見受けられる。その原因を考えることから始めるべきと思う。数値を挙げることを中心に考えると逆に良い結果が得られない恐れがある。 ・全国的にも体力低下が叫ばれており、荻小も例外ではないと聞き及んでいる。「食育」についても、意欲的な取り組みが見られるので、引き続き全校児童の体力向上に向けての施策を行ってほしい。 ・子供の体幹の弱さが課題である。日常的な学習や生活場面で、丁寧な声かけや働きかけをして、体幹を鍛えることを大切にしたい。
特別活動	**子どもが中心となる特別活動**、学校行事	・高学年への「あこがれ」低学年へのいやさしさ」をテーマに、子どもの自主的、実践的な態度を育て、自分のよさを生かす「思いやりの心」を育む特別活動の展開を工夫する。	・行事、特活を通して、他者理解を深める交流活動の実施。 ・異学年交流「さくら草まつり」「たかんじ班活動」の充実。 ・代表委員会を中心とした子供たちの自主的実践的な取組。 ・委員会・クラブ活動の主体的な運営。 ・JRC（青少年赤十字）活動の効果的活用。 ・ペア学年（1・6年、2・5年）を活用した運動体力調査の実施。 ・感染症対策を取りながら、教育効果を高める学校行事の工夫。	・コロナ禍において、行事、特別活動を感染予防を図りながら工夫して実施した。 ・異学年交流「さくら草まつり」「たかんじ班活動」を実施し、全校の子どもたちが交流できた。 ・代表委員会を中心にJRC（青少年赤十字）活動を進めた。（挨拶運動、募金活動） ・運動体力調査をペア学年（1・6年、2・5年）で高学年児童が低学年をサポートする活動として実施した。 ・各教科、領域の中で、異学年での活動を取り入れる工夫をした。	3	・子ども主体の特別活動を工夫し、互いに認め合える交流を広げる。 ・JRC（青少年赤十字）活動実践校として、活動を充実させる。	3.4	・コロナ感染防止のため活動に制約がありつつ、運動会、移動教室、異学年交流活動、校外学習などを内容や実施形態を工夫して実施し、子供たちの自主的、協働的な態度を育てている。この機会に、改めて学校行事などの意義を確認したい。 ・コロナ禍であるがゆえ後も工夫し行事を実施してほしい。 ・「アートウィーク」の取り組みは素晴らしかった。協力して作り上げた作品も個性あふれる作品も感動した。校内を巡って鑑賞できるのもよかった。 ・「さくら草まつり」では、各クラスの出し物で独自の特色を出すべく様々な創意工夫が見られた。また高学年の子が低学年の子を優しく誘導している姿にも、日頃の指導の成果が表れていたと思う。 ・コロナ禍が不安定なゆえでも、子供たちが喜ぶ行事を適切なタイミングと内容で開催していて、非常に感謝している。 ・コロナ禍で縮小した活動が、徐々にではあるが復活の兆しが見られ、異学年の交流が盛んになってきていると聞いた。またこニ数年、学年によってクラス数にばらつきが出てきており、教室配置にもイレギュラーが生じているが、それぞれがよって他学年との交流のきっかけづくりになっている例もあると聞いた。何が要効きるのかわからないが、こうした状況も荻小の個性と考えてもよいと思う。 ・コロナ禍にも負けず、子供たちの活動、行事を大切にして、できるだけの努力を行っていると感じる。
学校運営	**学校支援本部**との連携	・学校支援本部と連携し、質の高い授業や安全に配慮した授業を意識して教育活動の充実をする。	・学校支援本部やPTAとの連携。（外部講師、授業支援） ・校外活動や家庭科の実習の安全な実施のための補助支援。 ・学校園での栽培、園芸活動の充実。 ・地域人材を活用したキャリア教育の充実。 ・学校支援本部やPTAの協力による円滑な学校運営（行事補助等）。	・学校支援本部の協力のもと、特色ある教育活動を展開できた。 ・書の学習「言葉のチカラ」を全学年で実施した。 ・地域の協力により学校園等の栽培活動を進めた。 ・校外学習や実習の安全管理が十分にできた。 ・学校運営協議会と共に学校支援本部の活動の理解を図るリーフレットを作成した。	3	・人と触れ合う学びを大切にし、地域人材の活用を図る。 ・保護者に、学校支援本部の活動を周知し、保護者の地域参画意識も高める。 ・地域連携活動を展開し、子どもの「地域を見る目」を育てる。	3.5	・学校支援本部と連携して、地域の住民や関係機関の協力、支援により通常の授業や土曜授業などで荻窪小独自の取組を実施しており、子供たちが地域の住民とつながりを深めている。 ・地域人材の活用し、いつも活発に活動してほしい。 ・環境学習、キャリア教育、「とどけのチカラ」の授業は例年通り実施できている。ただ、畑の手入れは指導者の高齢化もあり難しくなった。 ・組織の役割や活動内容については、情報発信し続けることが大切であり、それにより様々な立場の方の意見が聞こえてくることで、充実した活動につながると思う。 ・保護者の理解・認知度の低さの改善が必要 ・実践的な良い支援が行われているが、人材を増やすために、参加が容易にできる組立が今後のために求められている。 ・書道の「言葉のチカラ」に代表されるように、卒業後も思い出に残る独自の授業や保護者の協力を得たキャリア教育など、大変なご尽力を頂いている反面、保護者の認知度・協力は低いように思える。広報活動もそうだが、CS、PTAとの協力を密にしていくといいと思う。 ・PTAの方々との交流や他校の支援本部との交流などと充実していた。
	学校運営協議会との連携	・保護者や地域と共に創るコミュニティスクールとしての学校づくりを行う。 ・「学校運営協議会委員」を中心に学校関係者評価を実施する。	・学校運営協議会の毎月開催。 ・教育活動の場の参観。 ・多角的な視野を活かした学校経営の方策の検討。 ・毎月の学校運営協議会の開催。 ・学校運営協議会の内容の周知（広報プリント発行）。 ・学校運営協議会委員と教員の交流会開催。 ・学校関係者評価の検討と実施。	・毎月、学校運営協議会を開催した。 ・教育活動の状況報告や感染予防に努めた参観を通して、教育活動への理解をもつ努力をした。 ・毎回「学校運営協議会だより」を学校ホームページに掲載し、家庭や地域に周知した。 ・学校支援本部と共に学校運営協議会の活動の理解を図るリーフレットを作成した。 ・学校関係者評価で、学校運営協議会委員を中心に、学校評価を行った。 ・教育調査「学校生活全般」の保護者肯定率は82.3％（前年比＋1.8ポイント）、「学校評価」肯定率77.4％（前年比＋8.6ポイント）であった。	3	・多角的な視野や多様な意見をコミュニティ・スクールの良さとし、「地域の学校」として充実した学校経営を進める。 ・PTAと学校運営協議会の懇談会を通して、保護者のコミュニティスクールの意義の理解を深める	3.2	・コロナ感染防止のための制約の下で、学校の状況と当面する課題を共有し、学校運営が円滑に進められるように有意義な協議、意見交換を行った。早い時期から、学校関係者評価の重点項目について協議し、理解を深めることができた。 ・学校運営協議会の活動がよく伝わっていることがわかる。 ・学校運営協議会の存在、活動内容の理解を図る新たな努力をした。 ・組織の役割や活動内容については、情報発信し続けることが大切であり、それにより様々な立場の方の意見が聞こえてくることで、充実した活動につながると思う。 ・保護者の理解・認知度の低さの改善が必要。 ・実際の学校運営は見守る側の協議会とは、今のところ、いつも関係で、運営されているように思う。しかしながら、もう少し主体的な活動を行うには、どのようにすべきかを議論する必要があると思う。それとも協議会という呼び名からして、主体的活動をやる必要はないのかもしれないが、委員がテーマの役割分担をしたりして、自身の目で確認するなど主体性が必要があるように感じる。 ・あまり表立った活動ではないため、保護者への認知度が低いのは例年のことだが、アンケートからはやはりすこし改善されてきているようにも感じている。広報誌など、学校との連携も以前より増えてきているように思うが、PTA、学校支援本部、地域とのさらなる連携が必要になっていくと感じている。 ・運営協議会が身近になるよう発信していくなどの準備を行っている。
その他	**指導の組織化**	・関係職員の専門性を生かし組織的な指導を展開する。	・スクールサポートスタッフを活用した計画的、効率的な学級事務、授業準備。 ・学校司書、理科支援員、特別支援教室専門員、学習支援教員、スクールカウンセラー、介助ボランティア等との連携。	・スクールサポートスタッフの活用を積極的に行い、校務軽減が図れた。 ・それぞれの専門性を活用、多面的な見方を生かした教育活動支援ができた。 ・学級支援員や介助ボランティアにより、個に応じたきめ細かな支援ができた。	3	・すべての教職員が重層的に子供に関わり、多面的な見方で子供を育てる。 ・教員間で切磋琢磨し、多様な人材を互いに活かし、教育活動を充実させる。 ・「学ぶ子ども」を育てるため、自己研鑽し、自らが学ぶ教職員組織でありたい。	3.1	・本校の教育や校務等に関わって多くの人材が専門性を発揮し、それぞれが組織的に役割を果たしている。学級支援員や介助ボランティアにより、子供のニーズに応じた支援をしている。 ・校内で多様な人材が協力し合いスムーズに関わり合っている様子がうかがえる。 ・本校の教員は若手が多いが、互いに授業を参観し意見や情報を交換して学び合い、子供たちの教育に熱心に取り組んでいる。 ・同一学年を担当する教員間で互いの授業展開について情報交換できる機会を更に充実させると良い思う。 ・教師不足が問題となっているが、一朝一夕に良い教師が誕生するわけでもなく、サポート体制を整えて保護者の理解にも十分に努めながら育てて欲しい。 ・年度当初の人員が足りない、また学期途中での担任交代など、人員面では不安の残る年度となったのではないだろうか・・これは学校だけでは解決が難しい問題かもしれないが、区や都、国は、もっと現場の声を聞き、全国的な人員調達の施策などを行ってほしい。このままでは教員の力量不足に目をつぶり、員数合わせの状況に陥るやもしれず、大きな問題であると認識している。 ・組織運営については、チームワークもよく、特に育休を取る教員が増えてきているのは、良い環境になってきている証左ではないだろうか。 ・教員同士のコミュニケーションが良いことを感じる。勉強会もよく開催されている印象がある。
	人材育成	・OJTおよびOff-JTによる人材育成を、組織的・計画的また主体的に行う。	・他校の研究会、研修会への積極的な参加と研修成果の校内共有。 ・主幹・主任教諭等による組織的・計画的な人材育成。 ・指導教授による若手教員研修、中堅教員研修と連携した毎学期1回以上の研究授業。 ・管理職による全教員の学期1回の授業観察・指導。	・若手教員の育成授業に当たり、事前に指導案を共有し、校内教員も観察し、意見交換した。 ・都中堅教諭資質向上研修の機会を通して、校内で情報交換し学び合えた。 ・自己申告の授業観察時に、学期1回以上の授業公開を行った。 ・校外の研修会に参加した教員が、校務システムに記録や報告のレポートを掲載し、そこでの学びを共有することができた。				